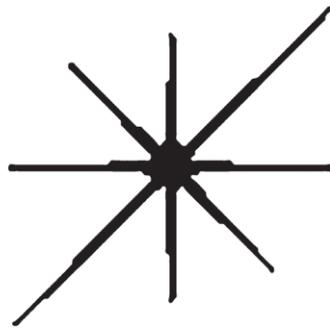


コメット通信 18

['22年1月号]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

【特集 コロナ禍を生きる】

コロナのもたらすものは何か
白川昌生——3

花冠日乗異文
野村喜和夫——5

猫と五輪とふたりの小説家
堀千晶——7

ニューヨークでの新型コロナの日々
武隈喜一——9

【連載】

不確かな彫刻
——コンテンポラリー・スカルプチャー 1
勝俣涼——11

さよなら、さよなら、さよなら！？
——Books in Progress 16
井戸亮——13

ジャック・チボーからセラフィマ・マルコヴァナ・アルスカヤへ
——裸足で散歩 18
西澤栄美子——15

【特集 コロナ禍を生きる】

コロナのもたらすものは何か

白川昌生

コロナ禍もすでに3年目に入ってきた。専門家たちのあいだでは、コロナは約2年半で落ち着いて、普通のインフルエンザになって行くだろうと言われている。事実、現在のオミクロン株は感染力は圧倒的に強いが、毒性は以前のコロナウィルスより弱くなっているらしい。このまま弱毒化が進んでいって秋までには普通のインフルエンザ的なものになるのだろうか。

私の場合、コロナが始まりかけていた2019年の終わりには、翌年の春にロンドンでの〈アーティスト・イン・レジデンス〉のプログラムに参加し、現地で作品を制作することも決まっていたのだが、コロナの拡大でイギリスに入れなくなり、プログラムは中断されてしまった。また、2020年の8月から丸木美術館（埼玉県東松山市）で個展をやることになっていたのだが、これもコロナによって延期になってしまった。その後、ロンドンでのプログラムは、日本—イギリスの関係者によるリモートでの会議（ズーム会議）に変更され、実行された。丸木美術館での個展は21年の東京オリンピック開催と合わせる感じで、7月からやることができた。丸木美術館での個展は、私がいまの時点で何としても実現しなかった個展で、そのために2019年から制作に入って準備をしてきたものであった。

日本国内でもコロナ感染者、そして死者が増加していき、社会全体がコロナ・パニックとでもいうべき状況になって行く一方、政府のコロナ対策の無能ぶりに嘔然とする日が続いていた。以前からこうした感染症による危機がいずれ来るだろうと言われていたにもかかわらず、まったく何の準備もせず、リスクマネジメントにもほとんど関心を払ってこなかった政府の危機意識の欠如に驚かされる毎日だった。一方、安倍政権成立以後、展開されてきた政治・経済の諸政策がそのままさらに強く押し進めて行くのに、私は大きな怒りを持たずにはいられなくなっていた。コロナ禍を自らの政治権力強化のために利用しているとしか思えなかった。

2019年に、丸木美術館から個展の話があった時に、テーマはすでに決まっていた。私は、しばらく前から、いわゆる「歴史修正主義」の問題を扱う個展をやりたいとずっと考えていたのだが、これは、2015年に「群馬県朝鮮人強制連行追悼碑」「長崎原爆投下地点碑」の二つの作品を発表した時から、心の中にあったテーマでもある。2019年には愛知トリエンナーレの一環として開催された「表現の不自由展 その後」が右翼的な人たちの抗議によって、会期の途中で展示が中止になるということが起こった。火付け役になったのは、名古屋の河村市長の展示への批判である。河村市長は、右翼政治団体の「日本会議」が主張している立場と同じ視点から批判を述べており、この立場は、自民党の前総裁で首相でもあった安倍晋三が、以前から戦争、日本に対して公言しているものと同じものである。彼らは太平洋戦争を植民地主義の戦争とは捉えていない、むしろ聖戦ととらえ、日本は何も悪いことはしていない、欧米からアジアを解放したのだ、という「歴史修正主義」の考えであの戦争を理解している。慰安婦問題、南京虐殺問題、沖縄集団自決問題などについても、そうした問題は存在しない、という立場なのだ。彼らは敗戦後に作られた民主主義の日本国憲法は、日本には合わないので憲法を改正して、かつて明治時代に作られた大日本帝国憲法に戻るべきだという考えで、政治をそちらの方向へ向か早稲ようとしている。

私は、こうした方向への動きがすでに危機的状況を作り出していると考え、「歴史修正主義」をテー

マにした作品を、今こそ制作すべきだ、発表すべきだと思っていたので、丸木美術館から話があった時には即座に引き受け、制作に入ったのだ。

私の発表はコロナ禍と東京オリンピックに重なった。歴史的に見ると、かつてスペイン風邪が大流行し、そしてそのあと、オリンピックが東京で開かれる予定だったわけだが、戦争が始まり、オリンピックは消えてしまった。今回、戦前の歴史を再現するかのようにコロナが起き、オリンピックが起き、街中は焼け野原状態で無人化する、軍備が増強され、戦争ができるような法律改正も行われ……日本は同じ過ちをまた繰り返してゆくのか、と私はコロナ禍のなかで何度も思った。

大きな疫病が起きると、その後、世界中どこでも、社会はそれまでとは違った価値観、政治・経済制度へと変化して行っているが、日本はどうなるのだろうか……と、コロナの終わりが近づいている今、未来を見定めたい気持ちで生活している。

執筆者について——

白川昌生（しらかわよしお） 1948年生まれ。美術作家。ヨーロッパ、アジア、日本の各地で、個展・グループ展多数。小社刊行の主な著書には、『日本のダダ 1920-1970』（編著、1988 / 2005年）、『西洋美術史を解体する』（2011年）、『[白川昌生 ダダ、ダダ、ダ](#)』（アーツ前橋編、2014年）、『[贈与としての美術](#)』（2014年）、『[美術・神話・総合芸術——「贈与としての美術」の源へ](#)』（2019年）などがある。

【特集 コロナ禍を生きる】

花冠日乗異文

野村喜和夫

私の詩集『花冠日乗』は、コロナ第一波のさなかに、散歩しつつ紡がれた言葉の束である。白水社のウェブマガジン「Web ふらんす」に、野村喜和夫（詩）小島ケイタニーラブ（音楽）および朝岡英輔（写真）というコラボレーション作品として、2020年4月30日から7月16日まで、毎週更新の全12回にわたって連載され、その後、同年11月に同じ白水社から書籍化された。初出から一年半以上の時が経過したいま、読み返してみると、ところどころで、ふと異文のようなフレーズが浮かび上がったりする。それを書きとめてみよう。

*

誰が私のなかでざわめいているのだ／おまえはおまえの不安を駆れ／と誰が／私のなかで——と私は『花冠日乗』を書き始めた。日本でもコロナ・パンデミックが兆し始めた2020年3月のことである。だが、最初から間違っていたようだ。まず、「不安」という言葉の選択。アガンベンによれば、われわれの生はゾーエー（生物学的な生）とビオス（言葉を話す生）のあいだを揺れ動いている。コロナ禍によってむき出しにされたのは、生きるか死ぬかといった生存的レベル、つまりゾーエーであった。そういう意味では、「おまえはおまえの不安を駆れ」の「不安」は、むしろ「恐怖」と言い換えるほうがふさわしかったのではないか。「不安」は内的もしくは実存的で、ビオスの領分に属するだろう。対して「恐怖」こそゾーエー、すなわち生理的・身体的であり、生存が直接危険に晒されているときのリアクションであろうからだ。つぎに、「駆る」という言葉の選択。「かる」にどんな漢字を当てるかという問題だが、私は何も不安を駆るために、つまり不安を加速させるために散歩に出たわけではなかった。むしろ「不安」を「狩る」ために、いやさらには「刈る」ために、あちこちほっつき歩いたのではなかったか。ついでに言えば、「誰が」と主語を立てたのも、ずるいと言えばずるい。不安を覚えたのは私に決まっているのだから。したがって異文は、誰のなかで私がざわめいているのだ／おまえはおまえの恐怖を狩れ／と誰の／なかで私が。

コロナが私を軟禁してしまったので／コロナが？ ちがうような気もする／主語はコロナでもなく私でもなく、コロナをも私をも包み込む何か／を二乗して三倍のコロナの影に加えたもの／から私を引いた残り／かもしれない——と私は『花冠日乗』を書き継いでいった。緊急事態宣言下のいわゆるステイホームを「軟禁」に喩えたわけだが、ある意味では、コロナは私を内部へと解放してくれたともいえるのではないか。なぜなら、散歩以外に外出する用事がほとんどなくなった私は、かつてないほど詩作に打ち込んだのであるから。これほどまでに状況に向き合いつつ、「詩人的に生きる」（ハイデガー）ことをリアルに実践しようとしたことはなかった。したがって異文は、コロナが私を解放してくれたので／コロナが？ そうだコロナによって／たとえば女の二乗と二倍の女の和は陽炎となり／陽炎の二乗と二倍の陽炎の和は涅槃となり／涅槃を二乗して三倍の私の影に加えたものから／空気を抜けば／ひとひらの海であろうから。

毒のある花冠は奪う、惜しみなく奪う／肉を踊らせたあの騒擾の記憶も／サキソフンの優美な曲線も／いまは遠い／でも母なる言語だけは残る、残るだろう／たとえまあたらしい廃墟のような街に放り出されたとしても——こうしてゾーエーからビオスへの流れを取り戻す試み、それが『花冠日乗』であった。コロナ・パンデミックによって多少とも歴史は変わるだろう。ペストがヨーロッパ中世を変えたように。だが私はそうした事柄にあまり関心がない。詩においては未来の言語が私の手へと到来して私に書かせているにしても、それは未来社会を予言するためではない。むしろ未来社会ではますます「詩人的に生きる」ことがむずかしくなるだろうと予感されるので、だからこそいま、「詩人的に生きる」ことを模索せよと未来の言語は言うのである。したがって異文は、**毒のある花冠は奪う、惜しみなく奪う／肉を踊らせたあの騒擾の記憶も／サキソフンの優美な曲線も／いまは遠い／でも未来の言語だけはやってくる、やってくるだろう／たとえ夕まぐれ、もうわずかな光しか残っていないにしても、その光を通して、手へ、私の手へ。**

出口はあるのだろうか／ない、たぶん／ここ自体が非常口なのだ、未来永劫にわたって／ヘヴン、非常口なのだ——と私は『花冠日乗』を締めくくった。「ヘヴン」と「非常口」を結びつけるのが詩の役割である。ビオスへの出口である。その方向において、『花冠日乗』を書いた意味も少しはあったといえるかもしれない。「非常口」を定義すれば、いまここにある危機を潜在させながら、脱出の可能性も確保されている場所ということであり、ヘヴンを詩的に言い換えれば、音韻的にハエがブンブン飛んでいる場所ということである。したがって異文は、**出口はあるのだろうか／ある、たぶん／といっても非常口だ／ヘヴン、非常口／ハエがブンブン飛んでいる／妙に明るい場所。**

執筆者について——

野村喜和夫（のむらきわお） 1951年生まれ。詩人、批評家。小社刊行の主な詩集には、『風の配分』（1999年、高見順賞）、『[よろこべ午後も脳だ](#)』（2016年）、批評には、『オルフェウスの主題』（2008年）、『[パラタクシス詩学](#)』（共著、2021年）などがある。

【特集 コロナ禍を生きる】

猫と五輪とふたりの小説家

堀千晶

さほど政治的な機微にふれているとはおもえない『細雪』は、なぜ掲載禁止になったのか、以前から気になっていて、1943年の『中央公論』を見てみたのだが、なるほどと首肯することになったのは、当時雑誌は勇ましい「総動員」を基調とする戦争関連の記事でほぼ全面的に埋めつくされており、京都学派の重苦しく長大な座談会「総動員の哲学」も『細雪』と同じ1月号に掲載されていて、そんな記事たちに囲まれながら、演奏会に出かけるのに着物が似合わないとか、帯が「キュウキュウ」と鳴るといって笑い興じながら仕度に手間どり、さらには話の長い美容室の「井谷」から電話がかかってきたりして、出かけるまでの時間がひたすら引き延ばされ遅延するのは、銃後において一刻の猶予も許さない動員が求められた時代において、あまりにのんびりとしていて時流に乗らないこととなり、谷崎自身の意図はともかく、ほとんど抵抗や拒否のような響きをまというるわけで、しかも『中央公論』1月号は買い求める人の列ができたらしく、たんに戦時下でのブルジョワ文化の描写という内容ばかりでなく、谷崎の書き方じたいの反時代性におもいたったのだが、『中央公論』6月号の編集部による「お断り」によるなら、「引きつづき本誌に連載の予定でありました谷崎潤一郎氏の長篇小説『細雪』は、決戦段階たる現下の諸要請よりみて、或ひは好ましからざる影響あるやを省み、この點遺憾に堪へず、ここに自肅的立場から今後の掲載を中止いたしました」とあるように、掲載中止は「自肅的」なのである。

「自肅」といい、「総動員」といい物騒な言葉だが、フランスでは大統領が2020年の「総動員」発言に引きつづき、2022年早々に「ワクチンを打たない奴らを糞みそにしてやる」と述べたのは、大統領選用といわれているが、そんなに糞便が好きなのだろうか。2021年1月6日に連邦議会襲撃が起った米国をはじめ、昨今の世界の状況は、チョムスキー（ひげを伸ばしてマルクスのような風貌になっている）によれば、「プロト・ファシズム」とのことで、その意味で今日との関係をなんらか透かし見たければ、1943年からもうすこし遡って、『猫と庄造と二人のをんな』が発表された1936年まで立ち戻ってみてもいいのかもしれない。二・二六事件の年といってもよいし（このち「肅軍」という語が頻繁にもちいられるようになる）、6月のフランスでの組閣を受けて「人民戦線」路線が話題になった時期でもあるし（実際には有給休暇の法制化のまへのようだが、ルノワール『ピクニック』が撮影された年である）、7月にスペイン内戦が勃発し（ファシズム諸国の支援を受けた軍がクーデタを起し、それに人民戦線政府と市民軍が対抗し、国際的支援が両陣営に加わる）、8月にベルリン五輪が開催され（遠征の待遇に憤った日本の陸上選手団が役員団と対立し、「選手団の会計に対する帳簿の提示要求と言う、海外遠征始まって以来の不祥事」があったという——『改造』1936年11月号、244頁）、つぎのオリンピックが「皇紀2600年」に東京で開催されることが決まった年でもあって、五輪は当然にも「聖戦」や「総動員」といった神話的・軍事的語彙で語られる。

聖火リレーを初めて導入したベルリン五輪に反応するように書かれたのが、『猫と庄造と二人のをんな』と同じ『改造』1月号に掲載された川端康成「イタリアの歌」であり——出獄後の中野重治「小説の書けぬ小説家」も同号掲載——、「スポーツ」と「戦争」をめぐる医学を専門とし、「跳躍」で「国際オリンピック大会」出場経験のある「鳥居博士」が、実験の事故で全身「火達磨」になり、白衣

が「可笑しいほど不規則な形に焼け」,「その燃えている人間の實に高く飛び上ること」に驚く, という「駄じゃれみたい」な場面から始まり, その後の入院と死に至る。その名から神社=国家宗教と鳥=飛行機を想起させる「戦争医学者」の「鳥居」を, 五輪的な跳躍とともに焔に包んで焼き殺しても, 「空中戦」にまつわる「軍の機密に属する」研究を嘲弄しても, この時点ではまだ「自粛」の必要はなく伏字もない。そのいっぽう, 二・二六事件をまたいで連載された谷崎『猫と庄造と二人のをんな』(1月号, 7月号)はというと, 政治的潮流を主題にするはずもなく——おそらく前年のものとおもわれる水害は取り込んでいる——, 庄造は猫のリリーを相手に「魚に滲みている酢をスツパスツパ吸い取ってやり, 堅そうな骨は噛み砕いてやってから, 又もう一遍摘まみ上げて, 遠くしたり, 近くしたり, 高くしたり, 低くしたり, いろいろにして見せびらかす」。そののち, かれの日常を支えてきた愛猫を取りあげられてしまって, 庄造はこれからどうするのだろうかとおもわないでもないが, 夜空のもとアンパンを手に草むらに身をひそめ, 二階の窓にリリーの影だけでも映らないかといじらしく待ったり, 先妻品子との遭遇をおそれおもてから逃げ出したりする姿に悲愴感は漂わないし, なによりかのじょが猫を可愛がるに決まっていて, リリーはその部屋のなかにあまやかな糞の匂いをふりまくだろう。

執筆者について——

堀千晶(ほりちあき) 1981年生まれ。現在, 早稲田大学ほか非常勤講師。専攻=フランス文学。小社刊行の主な訳書には, ジャン=ピエール・リシャール『ロラン・バルト 最後の風景』(共訳, 2009年), セルジェ・マルジェル『欺瞞について——ジャン=ジャック・ルソー, [文学の嘘と政治の虚構](#)』(2013年), ロベール・パンジェ『[パッサカリア](#)』(2021年)などがある。

【特集 コロナ禍を生きる】

ニューヨークでの新型コロナの日々

武隈喜一

2016年の夏から5年間、ニューヨークで暮らした。ちょうどトランプ政権の4年とその前後の選挙戦がすっぽりと収まる期間で、ことに新型コロナ発生からの1年は2020年の大統領選挙と重なり、「アメリカの分断」をまざまざと観察することになった。

2020年4月、ニューヨーク市では、新型コロナウイルスによる死者が連日500人を超えていた。死者の多くは養護施設の老人や基礎疾患のある人たちだったが、連日の死者数の報道で、町は異様な閉塞感に覆われていた。3月中旬のロックダウン以降、オフィス街は事実上封鎖され、仕事があっても建物に自由に出入りができなくなった。規制が緩む7月末まで、地下鉄の乗客はほとんど黒人とヒスパニック系のエッセンシャル・ワーカーだった。

テレビをつければ、埋葬場所が足りなくなったため、急遽ブロンクス沖のハート島にショベルカーで穴を掘って遺体を埋める空撮映像が流れ、クイーンズやブルックリンの病院では遺体安置所に収容しきれなくなった遺体袋が廊下に積み上げられている写真が、新聞の一面に載った。

当時住んでいた地区は、ヒスパニック系住民の多いイースト・ハーレムの近くで、近所には大きな病院がいくつかある地域だったせいか、この時期、救急車のけたたましいサイレン音は夜中も絶えることがなかった。それまで、インフルエンザが流行っても、街中では見たこともなかったマスク姿が、あっという間に日常となり、スーパーでも酒屋でも、みんな几帳面に6フィートの間隔をとって行列を作り、入店を待った。あれだけおしゃべり好きなニューヨーカーたちも、この頃は長い行列でも言葉少なで、ブロードウェイのミュージカルの休演よりも、バーやグロッサリーなど、大声で気さくに声をかけあう場が消えたことの方が、精神的に辛かった。

午後7時になるとアパートの窓を開け放って鍋やフライパンを思いっきり叩いてエッセンシャル・ワーカーを精神的に支援するセッションは毎日続き、街を走るクルマも目一杯大きな音で連帯のクラクションを鳴らした。

知り合いの黒人教会では、7月までに30数人が亡くなった、という連絡をもらった。日曜礼拝の朝には、みんな大きな体を揺らしてゴスペルを歌ったり踊ったりしていたが、普段でも階段の上り下りに息を切らす人も多かったから、何らかの基礎疾患を持っていたのだろうか。

朝からテレビのチャンネルをザッピングしながら、リベラルなMSNBCとトランプ支持のFOXのモーニングショーを見比べることになった。ほとんどの新聞や雑誌がデジタルで読め、ローカル・テレビのニュースもネットで見られるのは便利だった。新型コロナに対するトランプ大統領の政策についての評価は、テレビ局によって正反対で、MSNBCの視聴者とFOXの視聴者は、まったく別の国に住んでいるようなものだった。FOXは、マスク着用の義務付けに反対してロックダウンを解除する共和党の州知事たちを賞賛し、「何ものにも制限されないアメリカ国民の自由の価値」を強調していた一方、MSNBCは徹底的にCDC（国立疾病予防対策センター）の助言を受け入れた感染予防を推奨し、コロナ軽視は根拠のない陰謀論だと非難した。

興味深いことに、その後の詳細な全米データ地図で見ると、2020年11月の大統領選挙でトランプの得票が多数を占めたカウンティは、コロナの感染率の高い地域とほぼ重なる。大統領選挙とコロナ

とメディアの分析は、2021年1月に『絶望大国アメリカ——コロナ・トランプ・メディア戦争』（水声社）という本にまとめることができた。

アメリカではいまでも、新型コロナへの対応は、分断の最大の指標のひとつだ。

ニューヨークでは、東欧アシュケナージの日常言語だったイディッシュ語を習っていたが、イディッシュ語教室も、新型コロナの流行を境にネットでのリモートに切り替わった。先生を入れて四人の小ぢんまりした教室だったので、それまではマツアやホームタッシュやバーブカなど、祝日ごとに誰かが買ってくるユダヤ菓子を頬張りながら過ごした会話重視の語学教室は、リモートになってからはタルムードの中のストーリーや、ワルシャワ・ゲットーの記録なども毎回取り上げるようになり、作文や宿題も増えた。先生曰く、「いまなら辞書を引く時間も、宿題をする時間も十分あるでしょう」というわけだった。

新型コロナ下で孤立しないためには、語学のリモート学習は最適な選択肢だ。さっそく、ネットで講座を探しだして現代ヘブライ語を始めた。イディッシュ語を続けていると、ヘブライ語由来の単語が、感情や人間関係や価値観をあらわすキモで、習得すべき壁になっていることを感じたからだった。

講座の生徒は、民族、性別、年齢、職業はもちろん、住む場所もまちまちで、先生はエルサレム在住、生徒はブラジル、ウルグアイ、オーストラリア、米ミズーリ、米ニューヨークとばらばらで、授業の前の自由時間が情報交換の場となった。授業中、ヘブライ語以外はご法度なので、自由時間は英語が主だけれど、それぞれの国の新型コロナ対策の最新情報が聞けただけではなく、複雑なイスラエルの宗教・政治状況や、ブラジルでの反ボアソナーロの動き、なかなか表面では見えづらいアメリカ国内の反ユダヤ主義の潮流など、多くのことを知るいい機会になった。

日本に戻ってからも、イディッシュ語とヘブライ語のリモート講座はそのまま続けていて、宿題は増える一方だ。

執筆者について——

武隈喜一（たけくまきいち） 1957年生まれ。元テレビ朝日アメリカ社長。小社刊行の主な著書には、『[絶望大国アメリカ——コロナ、トランプ、メディア戦争](#)』（2021年）、『[マンハッタン極私的案内](#)』（2019年）、『[黒いロシア 白いロシア——アヴァンギャルドの記憶](#)』（2015年）などがある。

【連載】

不確かな彫刻

——コンテンポラリー・スカルプチャー 1

勝俣涼

イランのエスファハーンに生まれ、ドイツのベルリンを拠点として活動するアーティスト、ナイリー・バグラミアン（Nairy Baghramian, 1971-）の彫刻はしばしば、肉塊や皮膚を思わせる可塑的で不定形なフォルムと、それを支え、あるいは別のマッサと接続する、硬質な部分によって構成される。前者はシリコンやゴム、布といった素材によって、曲線的な起伏を備えた表面を形成し、フォルムの一つ一つは淡いモノクロームで覆われる。後者はアルミニウムなどの金属によって造形され、交差するフレーム、机のような自立形態、あるいはクランプのように作用する部位を担っている。両者の組み合わせはしばしば、「肉と骨」の関係を類推させる。

この身体的なイメージはしかし、彫刻の歴史においてヒロイックでモニュメンタルな大理石像が担ってきたような人体として、現前するのではない。バグラミアンの「肉と骨」は、身体を構成するあらゆる部分が一つの完全かつ象徴的なプロポーションへと統合され、その全体性に余すところなく奉仕する態勢から、どこまでも逃れていくように見える。むしろそれらは、断片化された器官（肝臓、腸、背骨、歯……）が、有機的な意味の連関を欠いたまま、別の器官と接合されるような状況を実演している。そしてその一部が、金属の人工的な硬さや光沢を際立たせることで、彫刻は自己充足するモニュメントからの逸脱をさらに加速させ、諸々の異質な部分によって補綴されたハイブリッドな様相を強調することとなる。

こうした形象の操作を通じて、バグラミアンの彫刻は、特異な身体性、すなわち身体的なものであることを主張しながらも、全体像を確定しがたい身体を獲得している。2016年に「Scruff of the Neck」のタイトルで展開された一連のシリーズは、その一例といえるだろう。入り組んだアルミニウムの竿の手前に、丸みを帯びた石膏の塊と金属製のプレートが互いに隣接、ないし隙間を埋め合わせるように装着され、全体が壁面からレリーフ状に迫り出している。歯科治療における補綴物が参照されたこれらの彫刻は実際、欠損した歯を埋め合わせる義歯を類推させる。アンドレ・ロットマンは展示空間の上下層にこの「歯」がインストールされることで、あたかも空間全体が口腔へと置き換えられるかのような効果を挙げることを指摘している。「首筋」を意味するタイトルは、この頭蓋的なモチーフから導き出されているようにも思える。と同時に、ロットマンが続けて述べるように、それは「首筋をつかまえる」という慣用表現へと容易に展開されもする⁽¹⁾。

この観点から、「歯」の連なりを、椎骨の連なり、すなわち「背骨」として読み換えることも可能であるように思われる。ある場合にそれらのイメージは、諸部分の配列を方向づける竿の曲線によって、襟首を掴んで（あるいは啞えて）持ち上げられ、宙ぶらりんになった動物の屈曲した体勢と重なるだろう。しばしばキャンティレバー式の支持構造によって、壁から突き出されたその「身体」は、思いのままの動作を制約されている。

整理するならば、ここから少なくとも、2つの事柄を看取することができるだろう。第一に、「歯」と「背骨」を両義的に表示するフォルムのために、その身体の唯一正当な様式なるもの、すなわちモニュメンタルな象徴性は瓦解していること。第二に、宙吊りの肉体はその運動能力を制限されていること。バグラミアンの彫刻はどこか、一時的な静止状態、あるいは変調の少ない緩慢な動きや発達を

体現するように見える。

この2点は、ダンサー、コレオグラファーであるイヴォンヌ・レイナーに対するバグラミアンの関心において、合流するように思われる。レイナーは自身の作品《トリオA》(1966)について述べたテキストのなかで、小さなエネルギーを一定の出力で滑らかに連続させる、「運動系列のいかなる部分も他の部分より重要なものとなっていない」ような動作を標榜している⁽²⁾。そこでは、一連の踊りのなかである一瞬、エネルギーがそこに向けて収束する特権的なポーズ(バレエにおける「グラン・ジュテ」のような)と、それ以外の体勢(ポーズとして価値づけられない身体)があるのではなく、あらゆる動作が等しく、ポーズとして読み取られるだろう。実際、レイナーがその動向形成に深く関与したジャドソン・ダンス・シアターの実践においては、「立つ」「歩く」「食べる」といった日常的で単純な動作の遂行＝「タスク」が、振付に取り入れられていた。

バグラミアンが形づくる、確かさを逃れる身体、あるいはハイブリッドな対象もまた、身体の序列化に、特権化された「良い身体」のイデオロギーに抗うだろう。彼女がその拠りどころとするのは、欠損し、異質な部分によって寄生された器官のイメージである。ここにおいて、無駄なく統合された自律的なプロポーションは差し押さえられ、中心軸を欠いた形象が呈示されることとなる。こうした形象は、彫刻を支える軸を複数の接地点へと分割すること、床や壁面を這う冗長な形態、変化に乏しいモノクロームの表面処理、量塊を支持＝拘束するようにして振る舞う金属の補足物などによって生成される。特権的な一つの身体は遠のき、その代わりに、絶えず状態の移行、再形成へと開かれ、あるいは像を結び直す、確定不可能な宙吊りのフォルムが差し出されるのだ。

【注】

* ナイリー・バグラミアンの作品画像は、下記のウェブサイトで参照することができる(2022年1月20日現在)。

<https://www.mariangoodman.com/artists/29-nairy-baghramian/> (MARIAN GOODMAN GALLERY)

(1) André Rottmann, "Nairy Baghramian: The Matrix of Sculpture," *Nairy Baghramian: Déformation Professionnelle*, Munich: Prestel, 2019, p. 105.

(2) イヴォンヌ・レイナー「夥しさのなかにおいて定量的にミニマルなダンス活動に見られるいくつかの「ミニマリスト」的な傾向の概括らしきもの、あるいは《トリオA》の分析」中井悠訳、『述』3号、明石書店、2009年、97頁。

執筆者について――

勝俣涼(かつまたりょう) 1990年生まれ。現在、武蔵野美術大学助教。専攻＝美術批評、表象文化論。主な論考に、「運動-刷新の芸術実践――エル・リシツキーとスターリニズム」(引込線/放射線パブリケーションズ『政治の展覧会：世界大戦と前衛芸術』、EOS ART BOOKS、2020年)などがある。

【連載】

さよなら、さよなら、さよなら！？

—Books in Progress 16

井戸亮

『火星人にさよなら』（鈴木雅雄著，5月刊行予定），この魅力的なタイトルを付された本を目下編集
中です。

火星人と聞いてまず想像するのが，タコのような足をもった頭の大きな生命体だと思います。その
イメージの元となったのは，H・G・ウェルズ『宇宙戦争』が描き出した火星人了。この小説が書
かれたのは1898年という年でした。歴史的にみれば，帝国主義の列強が植民地の版図を広げ，各
地でキナ臭い出来事が起こっていた時代でした。また，その前後の年でみると，大盛況を博したパリ万
博が1889年，そして1900年のパリ万博では4500万人以上もの入場者を記録しています。万国博覧
会というイベントには各国の科学技術を世に知らしめる側面があり，まさに19世紀末はヨーロッパ
の列強を中心に，科学技術の競争が行われていた時代です。

科学技術の進歩は惑星の観測など，具体的なイメージとなって報道されました。1877年にイタリ
アの天文学者スキヤパレリが火星に運河のような人工物があることを観測し，世間を驚かせました。
また，アメリカの実業家ローウェルは私財を投じて火星観測に打ち込み，「ローウェル天文台」を設
立し，火星にある幾何学的なさらに詳細な運河の観測を試みました。1895年には火星に関する著書
も刊行し，にわかに火星には知的生命体がいるという議論が活発化します。

その当時の火星人のイメージこそ，まさにH・G・ウェルズが想像したものでした。数々の興奮をもっ
て伝えられた天文学的発見により，この時代に生きた人々にとって「火星人了」という存在はリアルに
いると信じられていたことは容易に想像されます。それと同時に，人類にとっての「他者」がいると
いう衝撃が走ったときでもありました。

人類にとっての「他者」を発見したということの問題は，キリスト教国家にとって大変な議論を呼
びました——イエスは異星人の原罪も救ったのか，異星人も神が創造した存在なのか——。その衝撃
は作家たちの想像力を刺激し，さまざまな作品が生まれました。宇宙人は文学によってどのように表
象されたのか——この大変興味深い問題に焦点を当てたのが，『火星人にさよなら』です。本書はな
によりも，SFというジャンルが成立する以前の「SF的な作品」——とくに19世紀フランス——を
丹念に読み込み，作家たちの異星人表象を考察していきます。

ウェルズのSF小説に先立つ1854年，C.-I. ドゥフォントネーは『スター，あるいはカシオペアのΨ』
という書物を刊行し，ヒマラヤ山中で発見された隕石から未知の言語の文章を見つける，という話を
書きます。スター星の周りの衛星に住む住人たちの伝染病の危機や，それから逃れるための宇宙船の
建造，理想国家の建設と，いまではありきたりなアイデアですが，現代中国SFを代表する劉慈欣
の『三体』三部作を先取りするかのような内容です。

科学者で詩人のシャルル・クロは，1872年に「天体間のドラマ」を発表します。惑星間でのコミュ
ニケーションが確立された時代の，まさに地球外の＝地上レベルを超えた（extra-terrestre）美女との
不幸な恋愛の話を描きました。

革命家オーギュスト・ブランキはデモ煽動の廉で幽閉されていた1872年，『天体による永遠』を刊
行します。革命は実現不可能なのではなく，歴史はすでに無限回繰り返されていることによってす

に革命はなされているという、驚くべき論理をそこで展開するのですが、その背景には、宇宙には私たち一人ひとりとまったく同じ存在が無数にいて、これからなされることはすでになされているという宇宙観がありました。

さて、本書が最後に取り上げるのは、心理学者フルールノワとエレヌ・スミスという霊媒師の二人です。フルールノワは霊媒となったエレヌの口からでてくる異星の言語に興味を持ち、『インドから火星まで』という本を刊行します。エレヌが伝える火星語の言葉、そして「超火星語」なるものについて考察します。あまりにもぶっ飛んだ内容の本に思われるかもしれませんが、実はそこに、男女二人にまつわる精神分析的ともいえるファミリー・プロットが複雑に絡まっているのでした……

本書のタイトルになぜ「さよなら」という言葉が入っているのか。それは本書が取り上げる作家たちの異星人表象が古くなってしまい、いまでは通用しないということを示すためのものではもちろんありません。彼らは科学的想像力を持ちて人類史的な出来事である異星人との邂逅をイメージしたのでした。そしてこの邂逅こそ、われわれ近代人がもはや見ることが不可能となった「夢」だったのかもしれない。その「さよなら」に込められた意味を、ぜひ本書を手にとって確かめください。

執筆者について——

井戸亮（いどりょう） 1986年生まれ。水声社編集長。

【連載】

ジャック・チボーからセラフィマ・マルコヴナ・アルスカヤへ

——裸足で散歩 18

西澤栄美子

1914年6月28日、オーストリア＝ハンガリー帝国の皇太子、フランツ・フェルディナントと妻のゾフィーが、サラエボで、帝国からの独立を求めるセルビアの青年に暗殺される事件が起きました。1カ月後の7月28日に、オーストリアはセルビアに宣戦布告をし、ロシアはセルビアを支持し、ドイツとフランスは8月に総動員令を発令しました。ヨーロッパ諸国、およびアメリカ合衆国、日本も参戦した、史上最も多い死者を出した、第一次世界大戦が勃発しました。

第二次産業革命による戦闘兵器の近代化と、塹壕戦の膠着で、特にヨーロッパでの戦闘員及び民間人の死者は、膨大なものとなりました。フランスにおける死者は、戦闘員、民間人を合わせて1,697,000人以上、当時の人口の4.29パーセントが亡くなりました⁽¹⁾。筆者の在仏時の1970年代後半には、多くのフランス人家庭で、家族や親族にひとり以上の、この戦争の犠牲者がいると言われていました。11月11日の、第一次世界大戦休戦記念日(Armistice)には、フランス大統領は、青いヤグルマギクの造花を身に付けて式典に臨みます⁽²⁾。フランスで、第一次世界大戦を経験した最後の兵士は、2008年に110歳で亡くなりましたが、70年代後半には、休戦記念日前後のニュース番組には、この大戦を生き延びた兵士たちへのインタビューや、戦時中の映像が流されていました。では、なぜヤグルマギク(bleuet)なのでしょう？ この花の開花期は、夏です。筆者が在仏当時、現地のお年寄りに、大戦開戦当初の8月、動員されたフランスの兵士たちは、戦争は2、3カ月後、遅くとも初冬までには勝利のうちに終わり、その年のクリスマスには、家族や恋人とともに過ごすことを約束して、戦地までの列車に乗り込み、銃口にヤグルマギクを差して行軍した、ということから、この花を胸に着けるのだ、と聞きました。

第二次世界大戦に従軍し、ソ連軍によって3年間シベリアに抑留された父からも、「一番きれいだった頃」⁽³⁾が戦時中であつた母からも、戦争の話詳しく聞かされていなかった、中学生時代の筆者にとって、近・現代の戦争を幾分なりとも知ったのは、『チボー家の人々』⁽⁴⁾によってでした。開戦当初は、多くの人々が、すぐに自国が勝利し、戦争が終わると思ひこむこと、戦いが泥沼化しても、為政者が敗戦を認めるまで多くの時間がかかること、戦後に至るまで、多くの兵士や民間人が、心身に癒しがたい傷を負うこと(ジャックの兄、アントワーヌはこの大戦で初めて使われた毒ガス兵器によって命を落とします)、これらのことを最初に学んだのは、『チボー家の人々』によってでした。

筆者は、『チボー家の人々』を読んで以来、多くの書物や映像を通して、第一次、第二次大戦について学びましたが、実体験のない筆者が、戦争の現実を、ほんのわずかですがあたかも実感したかのように感じたのは、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ⁽⁵⁾の『戦争は女の顔をしていない』⁽⁶⁾によってでした。第二次世界大戦時、ソ連では、100万を超える女性が従軍しました。パルチザン部隊や、非合法の抵抗運動に参加していた女性を含めて、500人以上にインタビューをし、記録したのがこの書物です。さらに、この書物から女性狙撃手のセラフィマとその戦友たちの物語を紡ぎだしたのが、1985年生まれ逢坂冬馬のデビュー作、『同士少女よ、敵を撃て』⁽⁷⁾です。フィクション、ノンフィクションの垣を超えて、書物は読者に戦争の現実を垣間見せます。

【注】

- (1) 第一次世界大戦における日本人の死者は417人。『赤毛のアン』の最後の続編において、アンとギルバートは、義勇兵としてヨーロッパ戦線で戦った息子の一人を亡くし、もう一人の息子も負傷します。銃後のカナダでのアンと娘たちの、アンとは全く異なった青春も描かれています。
- (2) イギリスや英連邦では11月11日（Remembrance day）に、赤いケシの造花を胸に着けます。この大戦での最激戦地のフランス、ベルギー、ドイツの国境周辺の西部戦線地帯に咲く赤いケシの花は、兵士たちがこの土地に流した血の色であったからと言われていています。
- (3) 茨木のり子（1926-2006）の代表作の一つ、戦時中の青春を語る詩「わたしが一番きれいだったとき」を想起している。
- (4) Roger Martin du Gard (1881-2006), *Les Thibaults*, 1922-1928.
- (5) Svetlana Alexievich (1948-).
- (6) 日本語版は三浦みどり訳、群像社、2008年。2016年には岩波文庫に収録された。また、2021年8月にはNHK Eテレ『100分で名著』で、沼野恭子による解説で紹介された。
- (7) 早川書房、2021年。